

2021/04/04 イースター礼拝  
ヨハネの福音書 講解メッセージ④④  
『孤児にはしません』ヨハネ 14:18-14:20

■わたしはあなたを孤児にしない

「わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。わたしは、あなたがたのところに戻って来るのです。いましばらくで世はもうわたしを見なくなります。しかし、あなたがたはわたしを見ます。わたしが生きるので、あなたがたも生きるからです。」  
(ヨハネ 14:18-19)

復活したイエス様が、私たちのところに戻ってくるのは、私たちが肉体の死を迎えたその時、私たちを天に引き上げるためです。こうして、私たちも復活し、イエス様と共に生きるようになります。それが、「イエス様が生きるので私たちも生きる」ということであり、「私たちが孤児にしない」ということです。

「その日には、わたしが父におり、あなたがたがわたしにおり、わたしがあなたがたにおることが、あなたがたにわかります。」(ヨハネ 14:20)

「その日」とは、私たちの肉体が死んで、よみがえる時です。クリスチャンにとって、死は終わりではありません。その時、私たちはよみがえって、イエス様の言われたことが真実だと知るのである。

イースターはクリスチャンにとって喜びの時です。「喜び」とは何でしょうか。欲しいものが手に入ることでしょうか。人に認められることでしょうか。これらは、正確には「快樂」であって、「喜び」ではありません。「快樂」とは、消えてなくなる喜びのことです。おいしいものを食べても必ずお腹が空くようなもので、一時的には嬉しくて仕方ないのですが、だんだん消えていきます。

「喜び」とは、「こんな自分にもかかわらず、永遠に受け入れられている」と知ることです。イエス様は私たちを「孤児にしない」と約束してくださいました。イエス・キリストは、私たちが抱えている罪や死を背負って十字架に架かりました。これは、私たちが抱えているものを全部引き受けるということの意味しています。その証しがイースターです。神様が親として、私たちの苦しみや問題を丸ごと全部引き受けてくださっているのです。

つまり、イースターとは、あなたはこの先復活するという未来の話ではなく、今の話です。自分など受け入れられないと思っている自分が、神には受け入れられているということ、それを受け入れる勇気がイースターなのです。そのために、イエス様は復活した姿を見せ、「私を受け入れてごらんください。私はあなたを永遠に受け入れているから。」と迫っておられるのです。

このことを深く理解するために、まず、人間の苦しみについて、考えてみましょう。

## ■人が抱える苦しみとは何か

私たちが苦しいと感じることを書き出してみると、大きく3つに分類できます。

### 1. 有限性の苦しみ

有限性とは、始まりがあって終わりがあるということで、簡単にいうと「死」です。私たちの体もこの世界も有限性で、これが、私たちの苦しみの土台です。朽ち果てる体ゆえに病気になったり、朽ち果てる世界であるがゆえに、天変地異が起こったり、私たちは、その恐怖の中で生きています。その結果、私たちは、神様ではなく見える安心をむさぼるようになりました。「死」が、私たちの罪の原動力なのです。

### 2. 疎外の苦しみ

私たちは神のいのちによって造られました。ですから、私たちの土台は神であり、私たちのいのちは生まれながらに、神を知っています。善であり、永遠であり、自由である神を知っているからこそ、すべての人が拘束されることに抵抗を感じるのです。ところが、体が有限性になったことで、人は神がわからなくなってしまいました。「自分の知っている神がわからない」、これが疎外です。この不安によって人は、見える困難に不安を重ねて、恐怖を感じます。恐怖の根底にあるのは不安であり、その不安の根底にあるのは、神との疎外です。

### 3. どっちつかずの苦しみ

神を知っている私たちは、神の御心に従いたいと思っています。聖書はそれを、「御霊の思い」と呼びます。しかし、同時に、有限性から「肉の思い」も生まれるため、私たちは、御霊の思いと肉の思いのどちらに従えばよいのか、どっちつかずで苦しみます。何が良いことかわかっているのに、良いことに従えないのです。このように、人生に中心がないことが、私たちを苦しめています。肉の思いと御霊の思いの両方を取ることは無理だと、イエス様は言われました。「人は、二人の主人に仕えることはできないのだから、中心である神に戻りなさい」と、イエス様は言われます。中心である神に戻るものが、いやしです。

聖書は、この3つをまとめて、「死の恐怖の奴隷」と呼んでいます。それは、一言で言うなら、中心からずれてしまっているということです。私たちの本来の中心は神なのですが、有限性を持ったために、中心に定まることができず、死を恐れ、恐怖や不安を行ったり来たりします。これが「罪人」です。人前では良い面を見せるけれど、陰ではそうではないのも、中心がないからです。だから、誰もがこんな自分は愛されるはずがないと思っています。それが私たちの最大の苦しみです。この苦しみが本当にわかると、イエス様の福音がわかるようになります。

## ■神の福音

### ❖ 朽ちないからだ

有限性の苦しみに対して、霊の体、永遠のいのちを用意してくださっています。

## ❖ イエス・キリスト

疎外されている、こんな自分が愛されるはずがないという苦しみに対して、神様が用意してくださったのはイエス・キリストです。イエス・キリストは、私たちと同じ有限性を引き受けてくださいました。それは、私たちを愛し、見捨てていないからです。イエス様が死を背負ったのは、あなたを孤児とはしないことの証しです。そして、あなたを愛することによっての条件をつけないことを示すために十字架に架かりました。イエス・キリストは、疎外という苦しみから私たちを救うために来られ、無条件で愛される愛を示してくださったのです。

## ❖ 助け主

神は、中心に戻りたいと思ってもできないという、人間の弱さを知っておられます。そこで、助け主である聖霊を与えてくださいました。聖霊様の働きとは、どっちつかずの私たちを、神に従うように助けることです。

神様は、3つの苦しみに対して、3つの福音を用意してくださいました。その証しがイースターです。イースターは、イエス様が私たちの罪と死を背負い、3日目によみがえり、すべてを引き受けてくださったことの証しです。

私たちは、自分がどっちつかずで、弱く罪深いことを知っていて、自分自身の矛盾に気づいています。けれど、神はそれを直しなさいとは言っておられません。そのまま、ありのまま受け入れると言っておられるのです。これが、イエス様が言われた「私はあなたを孤児にはしない。私が生きるからあなたが生きる」ということの意味です。

## ■福音の根拠

なぜ神は私たちをまるごと受け入れてくださるのでしょうか。それは、神がこの世界を造った創世記から知ることができます。神が世界を造り、人に罪が入り込んでどうなったのかという話が、聖書全体の土台です。この創世記1章から3章をどのように理解するかで、聖書全体の理解が変わります。そして、創世記を理解するためには、新約聖書の光を必要とします。本体はキリストであって、旧約聖書はその影だからです。

「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった。夕があり、朝があった。第六日。」(創世記 1:31)

神はこの世界を見て、「非常に良い」と言われました。神は良いものしかお造りにならなかったのです。世界には神を否定するものはなく、すべてが永遠でした。その中でも特に、人は特別な造りかたをされています。

「神である主は土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生きものとなった。」(創世記 2:7)

「いのちの息」の「いのち」は、原文で複数形になっていて、三位一体の神のいのちを現しています。これが「魂」です。この聖書箇所は、「神の魂を吹き込まれて、人は生きる魂になった」というのが、もともとの意味になります。

人間とは何か、それは体ではなく意識を指します。意識とは、自分自身の中にある普遍的な運動に、体からの情報が刺激となって生じるものです。哲学者のプラトンがこのからくりを発見したのですが、これは、「神が体を造り、そこに神のいのちを吹き込んだことで、人は生きものとなった」ということです。私たちの中にある普遍的な運動とは、神のいのちです。私たちは、神のいのちによってあらかじめ知っていることを、体からの刺激を通して確認しているのです。

ですから、人間とは、人間という実体があるわけではなく、神が土台となっていて、体を通して生じる意識なのです。つまり、私たちは生かされている存在だということになります。神に支えられている存在であることを、新約聖書では、キリストの体の一部、器官、ブドウの木と枝などいろいろな表現で書かれています。

世界が良いもので、永遠性だったとき、私たちは神と同じ思いを共有することができました。この時、アダムとエバは裸であっても恥ずかしいと思わなかったと書かれています。それは、無条件で受容されている自分が見えていたということです。これが人の本来の姿です。

しかし、この後、蛇が登場し、人に罪を犯させて、死が入り込みました（ローマ 5:12）。こうして、永遠性だったからだが有限性になり、世界もそれに伴って有限性になり、今日のようななったと創世記3章に書かれています。

私たちは、このような事態になったのはアダムが悪いと考えがちですが、神は違います。神は罪を犯したアダムとエバに罰を与えるのではなく、悪魔に対して裁きを下すと言われたのです。

「神である主は蛇に仰せられた。「おまえが、こんな事をしたので、おまえは、あらゆる家畜、あらゆる野の獣よりもろわれる。おまえは、一生、腹ばいで歩き、ちりを食べなければならない。わたしは、おまえと女との間に、また、お前の子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、お前の頭を砕き、おまえは、彼のかかとかみつく。」」（創世記 3:14-15）

「彼」とはキリスト、「おまえ」とは悪魔のことです。これは、イエス・キリストが十字架で悪魔を滅ぼすということをおられます。神が裁くと言われたのは、有限性を持ち込んだ張本人、悪魔です。なぜなら、神が永遠性として造ったものを、悪魔は死を持ち込んで、それを否定しました。つまり、神の裁きとは、神を否定するものを否定することなのです。では、人間に対してはどうでしょうか。

## ■神は覆う

「神である主は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった。」  
(創世記 3:21)

皮の衣とは、動物の犠牲です。これは、イエス様がご自分を犠牲にされた十字架の型です。神は、まるごと全部私たちを引き受けてくださいました。これが、あなたを孤児にはしないということです。神ご自身が自らを犠牲にして十字架に架かり、有限性になって三つの苦しみを背負うようになったあなたをすべて覆う衣を着せてくださいました。

その理由は、私たちが良きものだからです。神は良いものしか造られませんでした。本来良きものが中心からそれた状態は、病気ということです。神が裁くのは、良いものを否定する力であって、神にとって人は守るべき対象、癒しの対象です。「私は人を裁くためではなく救うために来た」とイエス様は言われました。「救う」と「いやす」は、原語では同じ言葉です。

しかし、神が私たちを引き受けてくださっても、私たちの中には、どっちつかずの自分がいます。この世の価値観に認められようとして疲れ果て、神のもとに近づいてはまたこの世に戻っていく私たちは、振り子のように揺れています。けれど、聖霊様に助けられることによって、その振り幅は少しずつ小さくなっていくのです。

神は丸ごと引き受けて私たちがいやしてくださいます。有限性のからだを永遠性に変え、朽ちないからだを着せるだけでなく、私たちの罪を元通りにし、どっちつかずで中心から外れている私たちを、中心に戻れるように助けてくださいるのです。それには、神を信頼する信仰が必要です。神のことばを信じる信仰とは、中心に戻ろうとする運動です。だから、神はアダムとエバに次の処置をするのです。

「神である主は仰せられた。「見よ。人はわれわれのひとりのようになり、善悪を知るようになった。今、彼が、手を伸ばし、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きないように。」そこで神である主は、人をエデンの園から追い出されたので、人は自分がそこから取り出された土を耕すようになった。こうして、神は人を追放して、いのちの木への道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置かれた。」(創世記 3:22-24)

神の言われる悪とは、死のことです。神は悪魔の存在を知っていて、死を知っていられましたが、それを人も知るようになったということです。

有限性が入ってきたために、私たちは人の価値を行いで判断するようになり、頑張ったことを評価する成果主義が生まれました。自分の力で、永遠から得られる平安の代わりに自分の力で頑張って平安を得ようとする生き方を始めたのです。神は、そのようなことをさせないために、二人をエデンの園から追い出したのです。それは、罪を犯したことに対する罰ではなく、罪で苦しむ二人を助けるためです。信仰を育て、中心に戻すためには、神の姿が見えないほうが良いのです。つまり、信仰による救いの道です。

「私が天に上げられて神を見なくなることが神の義である」と、イエス様は言われました。イエス様の姿が見えている時、弟子たちは常に行いでイエス様に近づこうとし、頑張ってイエス様にほめられようと思いました。それでは、まったくいやしになりません。しかし、イエス様が天に上がって見えなくなってしまうと、行いで神に近づこうとすることはできなくなり、神のことばを信じて引き上げてもらうしかなくなります。さらにイエス様は、それを助ける助け主を与えるとされました。イエス・キリストの言葉を信じ、イエス・キリストに

引き上げてもらうこと、それが神の義です。その結果、私たちはどっちつかずの苦しみからいやされていくのです。

神がアダムとエバに対してした処置はこれと同じです。キリストが弟子たちから見えなくなって、弟子たちの神のことばを信じる信仰が育つようにしたのと同様に、エデンの園の追放は、イエス・キリストの復活を示した、アダムとエバを助けるための型なのです。私たちにとって重要なのは、神を信頼する信仰です。

つまり、神がこのような福音を用意してくださっている根拠は、私たちは良きものとして造られているということです。そこに、永遠性を否定する死が入って、良きものであることが発揮できない状況になっているのです。神は、私たちをもとの中心に戻すために、永遠のいのちという霊のからだ、罪を背負う十字架で無条件の愛と、信仰を訓練して中心に戻して癒そうとする福音を用意してくださいました。その証しがイースターです。

イースターとは、あなたをそのまま愛している、まるごと引き受けているという神様からのメッセージです。人は、自分の現実の姿を見て、こんな自分が愛されるはずがない、自分はだめな者だと思い込んでいますが、そうではありません。あなたの状態は病気のからです、それを癒してもらうために治療を受けに来なさいと、イエス様は御手を差し伸べておられます。イエスの復活は、あなたを丸ごと全部引き受け、孤児としないことの証しです。もし頑張らなければ愛されないのであれば、孤児になってしまうかもしれませんが、神はあなたに何の条件もつけません。あなたを良きものとして造ったからです。

神の裁きとは、神が造った良いものを否定するものを否定することです。そして、あなたを守り、あなたを本来の姿に戻すことです。つまり、神の裁きとはこの世に対するものであり、あなたを否定するものを否定する、というものです。ですから、自分を否定しているあなたのことも否定します。あなたが自分はだめな者だと感じる時、十字架はそれを否定します。

なぜなら、私たちは良きものとして造られたからです。私たちの土台は神であり、神に受け入れられています。神はあなたを丸ごと背負っているのです。だから、あなたを否定するものと戦い、あなたを否定するものを完全に否定します。その証しがイースターです。イエス様は、最大の否定は死を背負って克服なさいました。そのイースターを今私たちは受け取るのです。自分なんか受容されないと思っている自分が、神には受容されているとことを受け入れる勇気、それを迫るのがイースターです。